

天滿天神の信仰の變遷 (中)

文學士 長 沼 賢 海

三 室町時代

室町時代に至りて天滿天神は甚しく禪宗の影響を受けた。禪宗の影響と稱しても、禪の教理的感化を受けたといふのではない。平たくいへば、禪宗の眞諦たる信仰的影響を受けたことは勿論であつたが、同時に禪宗文學の影響を受け、禪宗繪畫(此名稱は少し無理であるが、禪僧に獨特な東山式繪畫を意味するのである)の影響も甚しく受けたのであるといひたい。

平安時代から菅原天神は文道の太祖と稱せられたが、それは道眞の歴史的人格に基いて居たのである。所が鎌倉時代に至ると、文道の太祖、風月の本主と稱へて、時世の影響を受けて、餘程宗教

的の意味を有することになつた。更に年代が下ると、天神講式(南北朝の頃世に出でたものか)を見るに、天滿天神の利生を列擧して、

故官位福祿隨業、除病延命酬酢、就中嗜文道人、則表其靈、
愁慮名倫、忽歸其實、加之於一切願望、莫成就圓滿、於其請
道藝、音莫不達淵源。

とある。文道、風月より轉じて諸道藝能の範圍にまで立ち至つたのである。此方面の信仰の發展に就いては、餘り興味ある變化もない。然るに天神は禪僧の詩的の情趣から種々の文學的附會を受けた點は大に面白い所である。又五山の學僧が我國文學の祖たる天神を己が眞諦の禪宗とゆかりを結ばしめやうとしたことも、一寸興味あることであ

る。更に又天神が東山式繪畫の畫題として、取扱はれた結果天神の信仰は餘程美化されて、益神秘化せられて來たことも面白く思はれる所である。以上天神の信仰が禪宗の感化を受けて變化した種類の點に就いて二三の説明を試みやうと思ふ。

(イ) 天滿天神と梅、櫻、附松

菅原道眞が生來梅を愛したといふことを、室町時代の頃から、禪僧に據て頻りに唱へられた。梅は古來南方支那人の最も愛した所で、詩文に謳はるゝもの頗る多く、我が國の漢文學者も必然的にも傳統的にも甚く之を愛した所から、文道風月の本主たる天神にも附會されて多くの詩的奇蹟が生れたのである。

道眞が特に梅を愛したといふ證據は甚だ乏しい道眞の遺文菅家文草や菅家後集を見ても、此説を確むべきものはない。成程道眞が十一歳の時始めて作つたといふ詩は、菅家文草の詩の第一の巻頭

に載せてあつて、題は「月夜見梅華」といふ題である。此外文集中に梅の詩は可なり澤山あるが、菊、竹、松、櫻などいふ題も強ち之れに劣つて居ない。歴代の勅撰集に見る道眞の歌に就いても同様の言をなし得るのである。所が此「月夜見梅華」の詩が、道眞が特に、梅を愛したといふ説をなすに有力な材料となつた。今一ツ之れに與つて大なる力のあつたのは筑紫へ左遷せらるゝ際詠じた「東風吹かば」の歌である。

「東風吹かば」云々の歌は、道眞の愛梅説を確むべき何等の材料にならぬことは、次の大鏡を覽れば自ら分明である。

昌泰四年正月廿九日、太宰權帥になしたてまつりて、ながされ給ふ(中略)、おさなくおはしけるおとこ君、なんな君たちしたひなきておはしければ、ちいさきはあへなんと、おほやけもゆるさしめ給ひしかば、ともにあてくだり給ひしぞかしみかどの御おきてきはめてあやにくにおはしませば、この御子どもを、おなじかたにだにかはさざりけり、かたがたに

いと悲しくおぼして、御まへの梅の花を御らんじて、
こちふかばにほひおこせよむめのはなるじなして春な
わすれそ

日本管開北野君、愛梅瀟洒又能、謫居西府三千里、一夜飛
香度滄雲、

とある。又歌にも室町時代の中頃前後のものと思
はれるものに、

梅あらば殿がふせ屋の下までも我立よらん悪寛しりぞけ、
唐衣おしてきたの、神ぞとは袖にもちたる梅にても知れ

といふのがある。又天神が包準に參禪した時に、
包準は天神に、

天下梅花主 扶桑文字祖 遺蹟正法眼 雲門答曰曹

との一偈を興へたといふことである。(梅城録)

紅梅殿の傳説は北野根本縁起以下類本に多く見
えて居る。特に十訓抄源平盛衰記等には此梅が筑
紫に飛んだといふ傳説を載せて居る。

コチフカバニホヒオコセヨ梅ノ花アルシナシトテ春ナラス
レソ

ト詠ミ置テ部ヲ出テ、ツクシニウツリ給テ後、彼紅梅殿ノ梅
カタエダトビ來リテ生付ニケリ、或時此梅ニ向テ

フルサトノ花ノモノイフ世ナリセバイカニムカシノコトナ
トハナシ

とある。道眞は我が宿の梅に別れを惜みたるので
はなく、家を出で、多くの子女に別れかねて、ふ
と前栽の梅によせて別れを惜み、子女の便りをい
のりて詠んだものであつて、此歌を根據として道
眞の愛梅説をなすは、事情を究めないものといは
ねばならぬ。

然るに室町時代の禪僧は、

菅公平日癖于愛梅、甲第在長宜風坊五條 置別殿純梅、而分紅
白二種、東齋才開清玩終日、雅詠甚夥、其辭京也、滔然對花
曰、東風有便、爲我送香(下略)

と説明して居る(梅城録)。又周鳳の臥雲日伴録に
菅公は梅を愛し、梅を「好文木」と稱したといふ
説を記して居る。明人すら此の説を聞いて村庵、
義堂と共にした天神の贊詞が五岳贊語に見えて居
る。即ち明の洪序が詩に、

トナガメ給へバ、コノ本

先人於故宅 籬廢於雪年 麋鹿猶棲所 無主猶碧天

ト申タリケルコソアサマシトモ哀トモ心モ及バレネ、カラ國

ノ御門、文チコノミ給ヒケレバ、開テ學問チコタリ給へバ、

チリシホレケル梅アリケルチ好文木トソ云ヒケル、其モ猶物

チバイハザリケリ、誠ニ一日ニ千里ノ山海チラケテトビ參ル

ホドナレバ、モノ中タルモ理ナリ、此梅コソ真木トハ覺レ

恐らくかゝる傳説が益々一般になつて、菅神梅を

偏愛すと稱せらるゝ様になつたのであらう。鎌倉

時代の終の頃にはかやうな傳説もあつた。又北野

根本縁起以下其の類本の多くは紅梅殿に愛した梅

を見て、東風吹かばにはほひおこせよ、云々と詠じ

た時、同時に、

梅の花ぬしをわすれぬ物ならば吹こん風ぞことつてもせん

といふ歌も詠んだといふ様になつて居る。(或る本

には此の下の句を吹きこん風にことづてはせよと

ある)併し此歌は後撰和歌集にある菅公の詠歌、

家よりとほき所にまかる時前燕の梅の花をゆひ侍る

櫻花ぬしをわすれぬものならば吹こん風にことづてはせよ

とあるを作り換へて「東風吹かば」の歌とならべ

たので、縁起の作者の悪意なき謔言と思ふ。此外

菅公には櫻の詩歌は少くないから、若し「東風吹

かば」云々の歌で道眞の愛梅家の説が成立つなら

ば、菅公は同時に愛梅家であつた説も或立つ分け

ではなからうか。事實鎌倉時代に現はれた天神縁

起の一種である北野事蹟の菅公西園下向の條には

(前略)すみなれ給ける紅梅殿のなつかしさのあまりに、こゝ

るなき草木にもちぎりなぞむすび給ける、

こち吹かばにはほひおこせよ梅の花あるじなして春なわす

れそ

櫻ばなぬしを忘れぬものならば吹きこん風にことづてはせ

よ

かやうのうたなどかきとめ給たることこそあはれに侍る

(下略)

とある。周防佐波郡防府町松崎神社所藏松崎天神

縁起の此の段の所を國寶帖中に木版を以て收めら

れあるを見るに、道眞の家(紅梅殿なるものであ

らう)の前栽には紅梅が吹き亂れて居ると共に、

櫻も咲き滿ち、紅梅殿の階には落花狼籍たる風情が書いてあるから、其詞にも、梅櫻の歌をかゝげてあることと思ふ。恐らくは右の北野事蹟と同文ならんと思はる。繪のみを見て、詞を見ないのであるから、たしかには分らぬ。されば鎌倉時代には菅公はやうやく梅を偏愛したといふ傳説の起原は出來上りかけたが、まだ櫻との關係もなかく親密であつたことを忘れてはならぬ。

かゝればこそ、盛衰記に見るが如き「梅は飛び櫻は枯るゝ」といふ悲劇が紅梅殿の前庭に於て演ぜられたと傳へ始めたのであらう。同書に、道眞が延喜五年正月筑紫に遷され、後は絶えず都のこゝとばかり追懷して居たが、二月のこゝ日影のどかに東風の吹いた日に、

こち吹けば香おこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ
とえいじければ、天神の御所高辻ひがしのとうるん、こゝば
い殿のむめのえださきなれて、雲井はるかにとびゆきて、あ
ららくじへぞまいりける。さくらばは御所にありけるが、御う

たなかりければ、梅さくらとて、おなじくまがきの中にそだち、おなじく御所にえだをかはし有つるに、いかなれば、むめは御ことばかり、我はよそにおぼしめさるらんと、うらみ奉りて、一夜が中にかれにけり、されば源のしたがつがむめはとびさくらばかれぬすがはらやふかくぞたのむ神のちかひを

とある。初め、菅公が愛梅の説もなかつた頃には西國下向の悲劇に、梅の歌のみでは、物足らず思つて、櫻の歌をもならべたものがあつたのを、かくては菅公の心が多いやうで、情が移らぬごでも思つたか、又は大鏡などの記事にでも縛ばられたか、梅ばかりにしやうと思つて「櫻花」とあるを「梅の花」と改作までしたのである。此自然らしき故意の取捨を材料として、右盛衰記の「梅は飛び、櫻は枯るゝ」といふ悲劇が傳へ始められ、かくて菅公愛梅の説はやうやく形をなしかけ、南北朝室町時代の禪僧が各自の趣味にあふどころから頻りに菅公愛梅説を吹聴するやうになり、支那人

まで之を傳へるやうになつたのである。

我國民性の詩想から言へば櫻は最も古へから歡迎せられて居るが梅はそれ程もてはやされなかつた。梅を重ずるのは支那詩想である。されば平安時代に於ても詩題として梅が多く、歌題として花が多いのである。併し文學の神の如く考へられた天神に梅も櫻もかく結びつくのは當然である。然れば古來我が固有の文學思想中に敬愛神嚴の對象の如くに考へられた松も亦天神に因縁を結ぶのは自然の現象であらう。

菅神の縁起中に松の現はれて來たのは、天慶五年七月十二日天神が京都七條坊に住む婢文子（北野誌所收、北野天滿自在天神宮創建山城國葛野上林郷縁起には多治比奇子とあり）に、北野に神殿を作るやうとの託宣があり、又天曆元年に福部、老松の二人の從者と現はれ、比羅社の社人に託宣して「我が從者老松は久しく我に從つて成りぬる

ものなり。我至る所に松の種を蒔く、我昔大臣たりし時夢に松が我軀に生へて、折れたと見たが即ち流さるゝ相であつた。松は我像のものである」(取意)と告げられたが、間もなく一夜にして北野に松が數千本生へたので、こゝに宮を立て、菅神を勸請したといふ傳説は早やく平安時代の末に起つたのである。或は北野社が出來てから一時に其社頭に松林が生へたともいはれたのである。此の傳説に基いて、室町頃から菅公愛松の説が起つた。義堂が鎌倉圓覺寺黄梅院に住した時作つた天神を祭る文に「威靈既顯、神化旁敷、松干北野、梅干西都(太宰府)」とあり、又應安六年北野神が、連歌の歌聖二條良基に託宣したといふ連歌(北野誌所收)の發句に、

紅に雪こそまじれ梅の花一しほかすむまつの夕陰

とあり、北野社の社僧に松梅院といふのがある。室町頃から多く現はれた天神の像には、梅と松と

を背景とすることが起つたらしい。天満宮の神紋に梅鉢や、三蓋松を附するのも皆此頃から始つたものではあるまいか。尙こゝに關聯して老松の傳に就いて一言して置きたい。

天神が松を愛するといふ事と、老松、福部の二人の從者に託宣したといふことを結びつけて、天神の愛松即ち老松であるやうに唱へ出した。世阿彌の作となつて居る。謠曲老松の中に、

諸木の中に松梅は殊に天神の御自愛にて紅梅殿も老松も皆末社と現じ給へり(中略)さて松を大夫といふ事は秦の始皇の御狩の時、天俄にかき壘り、大雨頻りに降りしかば、帝雨を凌がんと、小松の陰に寄り給ふ、此の松俄に大木となり、枝を

垂れ葉をならべ、木の間透間を塞ぎて、其雨を漏らさざりしかば帝、大夫といふ雷を贈り給ひしより松を大夫と申なり。
(前後略)

室町頃には太宰府の天満宮には紅梅殿、老松の末社ありしかと思はる。京都には、紅梅殿と稱するもの五條坊門に小社としてあつたことが拾芥抄に見えて居る。紅梅明神といふことは聞かないが、老松明神といふことは世に信せられて居た如く、道春の本朝神社考の北野の條に「老松明神者天神之眷屬也」とある。かくて老松も神格化せられ、目出度福神の一種となるに至つた。

東 航 雜 談 (カナダ及合衆國に於ける見聞の一二)

文學博士 内 田 銀 藏

一、緒言

二、ビクトリア、圖書館及古文書館

三、オアツタワ、議院附屬圖書館、古文書館

四、カナダ史上注意すべき二三の事實